

県立大学設立委員会（第8回）

日時：平成28年9月14（水）

午前10時15分から12時15分まで

場所：長野県庁 本館3階 特別会議室

（事務局）

皆様、本日は、お忙しい中、第8回の県立大学設立委員会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。開会前ではございますが、まず初めにお手元にお配りしてあります会議資料のご確認をお願いしたいと思います。

会議資料でございますが、次第、その下に委員会の委員名簿、それから委員会の設置要綱でございます。その下から資料になりますが、資料1が、前回、第7回の県立大学設立委員会以降の準備状況についてという資料。それから資料2が枝番で1から4までございまして、資料2-1が県立大学開学時までのスケジュールについて、それから資料2-2が設置構想の概要、それから資料2-3がカリキュラム案、それから資料2-4が総合教育科目、設置予定科目案について、でございます。それから資料3、県立大学（仮称）でございますが、専任教員等の選考状況についてということでございます。それから最後、資料4が海外プログラムについて、でございます。もし資料に不足がございましたら、挙手いただければ、担当の者がお届けいたします。よろしいでしょうか。

また本委員会につきましては、本日、公開で開催させていただきます。委員の皆様の発言内容につきましては、後日、委員の皆様にご確認をいただいた後、議事録といたしまして、長野県のホームページに掲載させていただきたいと存じますので、ご了承をお願いいたします。

（事務局）

ありがとうございます。それでは、皆様、おそろいでございます。ただ今から第8回県立大学設立委員会を開会いたします。私、しばらくの間、進行役を務めさせていただきます県立大学設立準備課の小野と申します。よろしく願いいたします。まず初めに県立大学設立担当部長の高田幸生よりごあいさつ申し上げます。

（高田担当部長）

どうも、皆さん、おはようございます。県立大学設立担当部長の高田でございます。本日は委員の皆様方、それぞれ大変お忙しい中を県立大学設立委員会にご出席をいただきまして、ありがとうございます。

さて、9月も半ばとなりまして、10月末に予定しております文部科学省への大学設置認可申請まで、あと1カ月余りという時期になりました。これまで教育課程・教員選考専門部

会、入学者選抜専門部会等を中心にカリキュラム作成、授業シラバスの準備、また海外プログラムの開拓、制度設計等について、多くの時間と手間をかけて検討、取りまとめにご尽力をいただいております。専門部会、委員の皆様、教員候補者の皆様には、この場を借りまして、あらためて感謝を申し上げます。後ほど、検討状況等につきまして、事務局よりご説明申し上げますので、ご審議をよろしくお願いいたします。

おかげさまで認可申請に必要な準備は整いつつありますが、これから10月末の大学設置認可申請に向けて仕上げの準備を進めてまいりたいと存じます。また設置認可申請後には、文部科学省等とのやりとりの他に公立大学法人の設立でありますとか、入学者選抜の実施等々、30年度の開学に向けた準備作業が山積しております。引き続き、ご指導、ご助言等をよろしくお願いいたします。以上、簡単でございますが、開会にあたってのあいさつとさせていただきます。本日は、どうぞ、よろしくお願いいたします。

(事務局)

それでは、続きまして安藤委員長からごあいさつをお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(安藤委員長)

はい。おはようございます。安藤でございます。本日は、大変お忙しい中を本委員会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。また、この間、カリキュラムや海外プログラムの準備にご尽力をいただいた委員の皆様方には、あらためて感謝を申し上げたいと思います。

私は、グローバル時代におきましては、長野から世界とダイレクトに結ぶ時代が来たのだと。そして、もうそういう中で地域のリーダーとして、個性豊かに活躍できる若者を育てていきたいと申し上げてまいりました。

本学では、1年次、全寮制と海外プログラム、原則的に全員参加ということを大きな特長としておりますけれども、後ほど事務局からご報告いたしますとおり、おかげさまで大変に充実した海外プログラムができてまいりました。

これらの経験を通じて、多様な価値観を持った人たちと積極的に交流し、また個人としてのアイデンティティを確立していきながら、社会にどう貢献できるかを自律的に考えられる人材を育成していきたいと強く考えております。

先月、21日から27日にかけて、本日、お見えの山浦委員、そしてまた阿部知事と一緒に米国のコロラド州を訪問してまいりました。コロラド州は、自然豊かな山岳観光の地という点でも長野県と共通するところが大変多いわけでございますけれども、今回、訪問した先々で大学を核にイノベーションを起こそうとする取り組みの実態をまざまざと見てまいりました。

私は、新県立大学もコミュニティの中核として、さまざまな人たちが集まって、お互いが

刺激を受け、それがイノベーションを誘発するような、そういうオープンな大学を目指していきたくと考えております。

今回の訪問の結果、長野県とコロラド州との間に教育や観光、また産業分野での人材交流を促進するための覚書が締結されました。開学時には、ミズーリ州の大学等で短期の海外プログラムを実施する予定ではありますけれども、将来、中長期の留学先の受け皿とすることも視野に入れまして、産業面での交流に加えまして、教育面におきましても、コロラド州との関係が、さらに一層強まっていくことをお伝えしているところでございます。

申すまでもなく、平成30年4月の開学まで、あと1年有余となりまして、最後を詰めていく大事な時期を迎えておりますが、現在、金田一学長予定者をリーダーといたしまして、中核教員の方々、そして、また職員の方々も大変に頑張っております。

私も関係者の皆様方と議論を深めながら鋭意努力してまいりたいと思っておりますので、ご協力をお願い申し上げます。簡単でございますけれども、冒頭のごあいさつに代えさせていただきますよう、よろしくお願いいたします。

(事務局)

ありがとうございました。なお、本日の会議でございますが、徳永委員、それから上野委員、山内委員、それからオブザーバーとして参加していただいている長野市の黒田副市長さんから、ご都合により欠席とのご連絡がありましたので、ご報告をいたします。

なお、本会議には事務局であります県立大学設立準備課課長の宮原以下、職員が出席をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。それでは、これ以降、議事に入っておりますが、進行のほうを安藤委員長様よりお願いいたします。よろしくお願いいたします。

(安藤委員長)

はい。それでは議事に入らせていただきたいと思っております。まず次第の1、第7回県立大学設立委員会以降の準備状況等につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

(宮原課長)

はい。よろしくお願いいたします。県立大学設立準備課の宮原と申します。私のほうから第7回県立大学設立委員会以降の準備状況について、ご報告を申し上げます。資料の1をご覧くださいと思います。

まず専門部会の開催状況でございますが、先週7日に管理運営の専門部会、9日に教育課程・教員選考専門部会と入学者選抜専門部会を開催させていただきました。管理運営の専門部会では、学則案について、ご検討いただいた他、公立大学法人の組織等についても意見交換を行っていただきました。

教育課程・教員選考専門部会では、この後、ご説明をいたしますカリキュラム等について、

意見交換をしていただきました。入学者選抜専門部会では、6月に公表させていただきました入試概要に基づいて設置認可申請書に記載する事項を確認いただいた他、来年の入学者選抜に関する準備体制づくり、あるいは試験、合格発表、入学手続き等に至る一連の業務スケジュール等について、意見交換をしていただいたところでございます。

次に高等学校等への説明状況でございます。6月24日には、県内の高等学校の高校生が県短期大学をご訪問いただいた折に、金田一副委員長、森本委員にお願いいたしまして、新県立大学の説明もさせていただきました。

その他、金田一副委員長、森本委員を中心に県内高校を訪問して、校長先生、あるいは進路指導の先生方との意見交換等を行ってきてございます。今月から11月にかけては、現在のところで県内8校からご要請をいただいて、模擬授業、大学紹介等を実施する予定としております。さらに11月から12月にかけては、大学説明会を実施する等して広報活動の充実を図ってまいります。

3点目の地域住民等への説明状況でございます。7月5日に後町キャンパスの工事説明会を実施いたしまして、象山寮、地域連携施設の建築工事に着手をさせていただきました。本日午後には、後町キャンパス周辺の地域の区長様方からのご要望もありまして、金田一副委員長と地域の皆様との懇談会を開催する予定となっております。

また県内企業との関係では、先ほどもお話ございましたとおり、先月、経営者協会の皆様と共に安藤委員長がコロラド州のほうに同行させていただきました他、7月には市内の電機部品の製造業者さん、あるいは食品製造業者さん等を、訪問をさせていただく等しております。今後も随時、企業訪問を実施してまいりたいという予定でございます。

この他、先ほども、ごあいさつにもございましたが、安藤委員長、金田一副委員長はじめ、専門部会の皆様、あるいは教員予定者の皆様には、各学科、分野ごとに打ち合わせ会議等におきましてカリキュラム案等の検討を精力的に進めていただいた他、本日の議題にもあります海外プログラムにつきましては、派遣先への現地確認、あるいは先方との交渉等、先生方にも手伝っていただきまして、大変、多大なご協力をいただきました。あらためて御礼を申し上げます。報告は以上でございます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。ただ今の説明につきまして、委員の皆様方からご質問、あるいはコメント等ございましたら、お願いします。金田一副委員長、何か補足説明がございますか。

(金田一副委員長)

私のほうから、まず先ほど委員長のほうからお話がありましたけれども、ここまで素晴らしい大学の立ち上げに際しまして、設立委員の先生方、内堀先生、濱田先生、山浦先生、上條先生に貴重な時間を割いて出席していただきましたおかげと、あらためて感謝申し上げます。

ます。

県立大学ということで、なかなか難しい制約の中で、かなり思い切った形の大学が、今、できつつあります。大変魅力的な可能性を持った大学ができつつあると実感しております。是非、この形を、これからさらに高めていきたいと考えております。

ただ今、宮原さんのほうから、各高校への説明のことがありましたけれども、私もこれからできるだけ多くの高校を回って、この素晴らしい大学の良さを県民の方々に知らせたいと思っています。以上、簡単ですけれども、私のほうからのあいさつとさせていただきます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。それでは、議事の2、大学設置認可申請の概要、カリキュラムの案につきまして、事務局からご説明いたしたいと思えます。

(宮原課長)

大学設置認可申請の概要とカリキュラム案について、順次、ご説明を申し上げたいと思えます。資料2-1、横組みになってございますが、開学までのスケジュールということで、ご覧をいただきたいと思えます。ちょうどこの表の上段中央にございますとおり、来月10月には、文部科学省へ大学設置認可申請を行う予定としてございます。

認可申請は10月31日付で提出することになるかと思っておりますが、この書類が受け付けられますと文部科学大臣から大学設置・学校法人審議会の大学設置分科会に諮問がされます。

審査過程では、分科会からのご意見に基づいて、必要な補正等を行うのが、むしろ通例と伺っておりますが、そうした補正手続き等も含めて標準的なスケジュールで審査が進みますと来年8月に結果が伝達されるという見込みでございます。

この時期に認可をいただきますと、直ちに第1期生の入学者選抜の手続きに入っていくという形になってまいるかと思っております。また公立大学法人の設立認可申請は、これとは別に手続きが必要でございます。来年度の終わり、1月末頃になるかというふうに想定をさせていただきます。そのようなスケジュールで進めてまいります。

次に資料2-2をご覧くださいと思えます。今回、文部科学省に提出いたします大学設置認可申請は、大変、詳細で書類数も数多いものとなっております。現在、書類としては最終的な調整作業に入っておりますが、その概要を設置構想の概要案ということでまとめてございますので、こちらでご説明をさせていただきたいと存じます。なお、この書類自体も文部科学省へ提出する書式の一つとなっております。

初めに大学の名称でございます。長野県立大学ということでございます。英訳名は、「The University of Nagano」といたします。ちなみに上田市にございます長野大学、英訳名は、「Nagano University」となっております。

学部、学科、入学定員等は、これまでご説明をしてきたとおりでございます。それぞれ学

科の所に学位の名称を記載してございます。学士の分野名として広く通用する名称というところも考慮させていただきまして、グローバルマネジメント学科では、学士（経営学）、食健康学科では学科名と同様になります。こども学科は学士（教育学）といたしたいと思っております。

下の段、設置の経緯について、でございますが、平成22年に設置いたしました長野県短期大学の将来構想に関する検討委員会と平成24年に設置をいたしました県立大学設立準備委員会の検討経過、その結果としての基本構想の決定について触れてございます。

1ページおめくりいただきまして、2ページになりますが、設置の必要性という所でございます。3点、記載をしてございまして、一つ目は、いわゆる大学収容力が、長野県、全国でも最低水準にあるという中で、県内の高校生に新たな四年制大学の選択肢を提供する必要があるということ。それから2点目としまして、グローバルな視野を持ってビジネスや地域社会でイノベーションを起こせるような人材を養成していく必要があるだろうということ。それから3点目といたしまして、長野県の知の拠点として、地域づくりに貢献する大学を設置する必要があることという、この3点を記載してございます。

学生確保の見直しにつきましては、前回もこの委員会でご報告をさせていただきました高校生を対象としたアンケート調査結果、これをベースに入学者のニーズがあることを、ご説明をさせていただいております。

3ページに参りまして、地域・社会的需要の所では、各学科で想定をされます卒業後の進路の例を、記載をした上で、企業向けのアンケート調査結果に基づいて、人材の需要があることを説明してございます。

教育課程の編成方針について、でございますが、基本方針としましては、学科ごとの専門教育科目、全学共通の総合教育科目を通じまして、学士力を培うカリキュラムを編成することとしております。

カリキュラムの内容は、この後で別にご覧をいただきますが、本学の特色として、海外プログラム、英語力の強化の取り組みについて、ここで触れております。健康発達学部の2学科につきましては、管理栄養士国家試験の受験資格でありますとか、保育士の資格ですとか、取得可能な資格についても明記をさせていただいております。

下段の教員組織の編成方針につきましては、基本方針といたしまして、専門教育科目の主要科目には専任の教員を配置、業績、経験を持った教員を専任する旨を、記載をしてございます。文部科学省の審査結果が出まないと、公表は、なかなか難しいのでありますが、熱意と業績の大変高い先生方に来ていただけることになっております。また教育研究水準の維持向上策についても記載をさせていただきました。

4ページの施設整備の計画につきましては、現在の短期大学の校地、校舎を一部活用しながら、外構工事まで含めると平成31年度までに計画的に整備をしていくということ、記載をしてございます。

最後に特記事項といたしまして、グローバルマネジメント学科のコース制、それから1年

次全寮制について、記載をさせていただきました。この概要書は、冒頭申し上げましたとおり、文部科学省の書式に沿っておりまして、記載事項につきましても、ある程度、指定がございますので、総括的なものになっております。

少し補足ということで、資料2-3以下で各学科等のカリキュラムの特色について、若干ご紹介をさせていただければと思っております。資料2-3は、カリキュラムポリシーということで、教育課程の編成方針を学科ごとに記載をさせていただいております。学科ごとに学生が目指すべき人材像というものによって構造化したカリキュラム編成をしていただきました。その基本的な方針を、記載をさせていただいております。

また各分野の先生方に補足を、お願いをしたいと思います。資料2-3の次にA3横版の大きな資料が付いてございます。カリキュラム学年進行表の案ということで、若干、説明をさせていただきたいと思っております。

初めに付けてございますのが、グローバルマネジメント学科の授業科目と学年進行表でございます。表の左から右にかけて、学年ごと、本学は4学期制を採用いたしますので、1学期から4学期に分かれて科目の配置を、記載をする形になっております。1学期、約2か月間に集中して一つの科目を受講するという形が基本となっております。

科目につきましては、上段のほうに総合教育科目、下段に専門教育科目、下に行くに従って、応用、あるいは展開の科目が多くなっていくような形で記載をしております。基本的な内容から応用的な科目へと順に学んでいただけるような配置をするというようなことで、原則としてございます。

表の左上をご覧くださいますと、1年次から2年次にかけて、集中して英語の科目が配置されております。若干、少し網掛けになっている所、総合教育科目につきましては、この後、別途、科目の一覧表を、記載をしておりますが、若干、特徴的なものを申し上げますと、その下にあります発信力ゼミと書いてあります所、大学で必要とされる基礎的な能力、読み書き発表するスキル等を学ぶゼミ形式の科目となっております。

象山学というの、その下にございます。佐久間象山の名前から取ったものでございますが、象山自身について学ぶというよりは、毎回、県内外で活躍をされている企業の経営者の方、あるいはイノベーターといわれるような方を招きまして、現実社会のさまざまな課題、あるいは、それに対する挑戦について、語っていただいて、学生が自ら能動的に現実に向き合っていく姿勢を身に付けていただきたいという狙いの科目でございます。

その下にあります情報リテラシーは、コンピューターでありますとか、ネットワークを利用するための基本的なスキルを学ぶ科目、この辺が1年次の必修科目となっております。

下のほうに参りますと、専門科目では、分野で言いますとマネジメント系科目、あるいは経済学系の科目、行政、公共政策学といった幅広い分野の基礎から応用に至る科目を配置しております。

下のほうにゼミの記載がございますが、1年次の先ほどの発信力ゼミに続きまして、2年から4年まで専門ゼミナールを、配置をいたしまして、高い能力をお持ちでいらっしゃる

す教員の方によります少人数教育を目指しております。

1枚めくっていただきますと、今度はA4版でグローバルマネジメント学科、2年次から分かります三つのコース別の履修のモデルをお付けしてございます。表の見方としましては、まず初めにグローバルビジネスコースというのがございますが、左の下のほうにこのコースを履修する学生の目標とする卒業後の進路の例を記載してございます。

例えば1枚目のグローバルビジネスコースでは、将来、経営者を目指すような方、経理、財務のスペシャリストを目指す方、マーケティングの關係に進めたいという方、あるいはグローバルに活躍されたいといった方、そういった例を示して、そういった方にそれぞれ推奨される科目の取り方を、右のほうに記載をしてございます。

それから1枚、おめくりいただきますと、同じグローバルマネジメント学科の企（起）業家コース案ということで記載をしてございます。前回、6月の設立委員会では、ソーシャル・アントレプレナーコースと提案させていただきましたが、必ずしも大学を卒業して、すぐベンチャーを立ち上げられるとも限らないのではないかと、幅広く企業家精神を学ぶことを高校生に分かりやすく示したほうがいいのではないかとのご意見を頂戴いたしました。今回、企（起）業家コースという名称で進めさせていただきたいと思っております。

このコース、左下にございますように、将来、社会起業家を目指す方の他、長寿企業が比較的多い長野県にありまして、例えば家業を継がれる、事業承継される方、あるいは事業承継にあたって新たな分野に踏み出そうという第2創業を目指すような方、あるいは起業しやすい地域の環境づくり、こういったものに必須な創業支援のコンサルタント等について学びたい方等を対象に基礎的な経営学、アントレプレナーシップといったところから実際のビジネスプランづくりまで学べるような特長的なコースとなっております。

3枚目には、公共経営コースについて記載をしてございます。これも将来、いずれはというところを含んでございますが、自治体の首長、それから議員、あるいは自治体職員、団体職員等、公共経営に携わる方に向けたコースとする予定でございます。

もう1枚、めくっていただきますと、もう一度、A3、横版のカリキュラム表となっております。食健康学科のカリキュラムでございます。管理栄養士の国家試験の受験資格を得る上で必修の科目が多くなっておりますが、この学科におきましても英語教育の充実、少人数教育といった特長は、他の学科と同様でございます。

卒業後の活躍の場を広げる上で、専門基礎科目の所に上から5、6段目でございますが、独自科目という所がございます。経営学入門、アカウンティング入門、リーダーシップ論、こういった科目も配置をしてございます。

さらに先ほどちょっとご覧いただきましたカリキュラムポリシーにもございましたが、基礎との関係性を意識しながら、より実践的な教育を行うという狙いで、3年次の所、4学期の下のほうに参りますと給食、保健、臨床といった各分野にわたった臨地実習を、豊富に用意をしているところが、特長となっております。

次にこども学科のカリキュラムですが、資料の中段から下、専門教育科目の下のほうにあ

る展開科目といった所では、自然保育ですとか、子育て支援、例えば発達障害のある方の保育といった分野の科目ですとか、現在、保育の最前線で課題になっている事項を取り上げる保育臨床特殊講義といった科目が配置されているところが、この学科のカリキュラムの特色とっております。

いずれの学科の表にも最下段に履修上限、CAP 制という欄がございます。1 年間に履修登録が可能な単位数の上限を定めまして、予習復習を含めた学習時間を確保していただき、一つ一つの科目が、しっかりと身に付くようにしていただきたいという CAP 制という制度を導入する予定でございます。

最後に各学科、共通の総合教育科目の一覧表を資料 2-4 として、付してございます。各学科共通の総合教育科目として、多彩な人文系、語学、社会系、自然・情報系、こういった科目を用意しているということでございます。長くなりましたが、説明は以上でございます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。かなり盛りだくさんですけど、今の説明に加えて、金田一副委員長から何かございますか。

(金田一副委員長)

ただ今、準備課のほうから大変、詳しい説明をされましたので、私のほうからは、この大学の基本方針として、教養教育と専門教育、両方大事だということを申し上げたいと思います。

最後にあります資料の 2-4 を見ますと分かるように、かなり総合教育科目が充実しております。小規模大学としては、かなり破格に充実しているのではないかとっております。

教養は、織物で言えば縦糸、専門が横糸で、どちらも、一方がなければ、織物として成り立たないということです。その両方が、うまく組み合わせさせて、人間として素晴らしい人材を輩出できるのではないかと考えております。その点だけ一つ加えさせていただきます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。それでは、今回の委員会の中でカリキュラムに関する説明が一番大事なところでございますので、それぞれご専門の立場から、学部長予定者、また委員の方々にご説明いただきたいと思います。それでは、グローバルマネジメント学部につきまして、森本委員、お願いします。

(森本委員)

グローバルマネジメント学部では、目指すべき人材像というのを明らかにした上でカリキュラムを作っております。それに必要なものが何かということで、カリキュラムポリシーの

資料の2-3をご覧くださいますと分かりますように、グローバルな視野と教養を育む海外プログラムの実践とグローバルな交流のための実践的な英語力の修得、社会人基礎力を構成する問題発見力や発信力の修得、事業経営や公共経営に必要な専門的知識や論理的思考能力の修得、事業創造のための主体性や創造力を育む現場体験の実践、人間性を育む少人数教育の実践ということをカリキュラムの根幹に据えております。

そのためにこの学年進行表を見ますと、これ、ご覧いただきますと、1年次、ほとんど授業がないように見えますけれども、実は教養を、まず学んでほしいということで、専門科目を必要最小限に抑えて、英語力、週4回100分授業がございます。それに集中して勉強してほしい。もちろん教養科目、集中的に取ってほしいということで、専門科目は2年以降に集中的に取るように配置しています。

それからカリキュラムの中で、授業科目、これは恐らく県内の大学では、ほとんどあり得ないような充実した科目構成になっております。例えば公共経営を見ますと、これは行政学を主体とした科目ですけど、これを備えた大学っていうのは、ほとんどございません。それからもちろん企(起)業家コースというのも、県内の幾つかの私立大学にはありますけれども、それとは全く視点の違うような科目構成になっております。

もちろんグローバルマネジメント学部の中のグローバルビジネスコースに至っては、例えば経営組織論、あるいはマーケティング論、そういう科目に2名の先生をそれぞれ配置しております。こういう大学もほとんどありません。ですから、それに向け対応コース、充実した専門科目で構成されております。ということでよろしく願いいたします。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。それでは、食健康学科につきましては、笠原委員、ご説明をお願いします。

(笠原委員)

食健康学科につきましては、今ほど、グローバルマネジメント学科のほうからお話がありましたような遊びがありませんで、管理栄養士の養成に指定された科目数というのが、かなりな数になります。

それで、そういった中で学生を採って履修条件を決めていくということがありましたので、大変、苦勞いたしましたけれども、一つには4学期制ということを生かして、先ほどご説明もありましたが、実習、3年、4学期の実習を非常に充実させております。

これは、1年次から基礎をしっかりと学んだ上で実践科目につなげ、そして最終的な取りまとめとして、臨地実習で総合的に学ぶということと、それから地域の活躍しておられます現場の管理栄養士の方々との連携を深めるというようなことから、いろいろな職域にわたる体験をできるように配置してございます。

学生が、こういった基礎と実践というものの関係性をしっかりと認識した上で教育を主体

的に学べるような配慮をしていくというところが、食健康学科の大きな特徴ではないかと思っております。

もう一つの課題であります管理栄養士の養成ということと、それから、当初から、いろいろな方から申されておられました食産業への地域への貢献といったような意味から、現在、インターン等も含めて検討中でございますが、今後、さらに発展させていきたいと考えております。よろしく申し上げます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。それではこども学科のカリキュラムにつきまして、太田委員からご説明をお願いします。

(太田委員)

それでは、こども学科のカリキュラムですけれども、こども学科のカリキュラム、こちらは、カリキュラムポリシーにありますように、まず長野県の自然、こういったものに立脚した保育の在り方っていうのを学んでほしいというのが、一つあります。それから、あと今日の保育をめぐる課題ということで、特に発達的な支援を要する子どもとか、それから保護者に対する支援とか、そういった観点も大事にしていきたいと思えます。

カリキュラムとしては、幼稚園教諭が1種免許と保育士資格を取得できるということ。それから海外プログラムで視野を広げて、教養のある教員を育てていきたいというふうに考えています。

先ほど、宮原さんからのご説明にもあったとおり、左側のほうにあるようなもの、基礎科目、基幹科目、展開科目という所で基礎的なところを、まずしっかりと早めに学んでもらって、基幹科目のところ、テーマ、内容を充実させて、展開科目のところ、視野を広げていくということでございます。

ゼミナールが一番下の所にありますけれども、2年次から卒業研究まで3年間を通して、少人数のゼミで学生の学びのニーズに応じていくような、そういうスタイルのカリキュラムということにしております。

一番下にCAP制の上限単位数があるのですが、その上にそこに設定されている単位数がありますが、少し下がるので、ということは、つまり、自由に取れるものが他にもあるということで、教養系の科目も充実していますので、総合教育科目の中から教養を広げていくような科目も取ってもらって学んでいく、そういうふうなコースとしております。以上です。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。それではカリキュラム全般につきまして、あるいは個別の面からも結構でございますけれども、他の委員の方からも意見をいただきたいと思えます。まず濱田委員、どうでしょうか。

(濱田委員)

ちょっと前回お休みしたので確認をさせていただきたいのですが、これは、全部のカリキュラムを載せたものですが、最近、大学だとカリキュラムマッピングとって、A4、1枚ぐらいで流れが分かるようなものを、高校とかに宣伝に行く際に作っているのですが、そういうものは作られるご予定があるのか、というのが1点。もう一つはCAP制ですが、今はどこの大学も単位に上限を決めて十分に学べるようにということをやっているのですが、それと同時に、成績の良い学生には、CAPよりも多めに取らせるというようなことを、いろいろな大学でやっていて、自分はもっと学びたいという学生に対しては、モチベーションを上げるためにやっているのですが、この「45」というのは標準だと思うのですが、そういうことも考えていらっしゃるのかどうかという2点を、お伺いしたいと思います。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。それについてどなたか。金田一副委員長、お願いします。

(金田一副委員長)

私のほうから。カリキュラムマッピングについては、すみません、僕が勉強不足だったので、是非、きちんと作成して、高校生が分かりやすいような形で宣伝していきます。貴重なアドバイスありがとうございます。

それからCAP制については、もっといろいろ資格を取りたいという人もいて、そうなったときに確かにこれでは足りません。そういう方々のためには、これを超えても大丈夫な制度も検討するつもりでございます。その辺も、柔軟に対応していきたいと考えています。ありがとうございました。

(安藤委員長)

ありがとうございました。上條委員、何かご意見ございますか。

(上條委員)

全体的な印象としますと、二つの学部があり、学科、コースがありという、そういう意味で言うと二つの学部、そしてそれぞれの学科というのが、かなりやっぱり四大ですから、自立という言葉ですかね。要するに相互の関連というのが、割合ない大学になったのかなという、そういう感じを受けます。

健康社会コースも、結局はなくなったのだらうと思いますけれども、960人ぐらいの大学になりますから、大学の中での教員の交流、そして学生の交流、こういうものが私の経験で言うと、かなり重要なものになるのではないかという印象は非常に強く持っております。

あまり学部と学部、学科と学科、こういうものが孤立した形にしますと、学生のためにも教員の全体の、大学と一緒にやっという、そういう面では少し問題が残るのではないか。そういう印象を持ちました。

短大と四大は当然違うわけでありまして、短大は、どちらかという豊かな中間層をつくるというような、そういう市民教育というようなところにウエートを置いたわけですが、全体として、地域の指導者の養成、そういうふうに移されていく。それはそれで、やはり県立大学、四年制大学の役割であろうと。そのように理解いたしました。以上です。

(安藤委員長)

どうも貴重なコメントありがとうございました。笠原委員、お願いします。

(笠原委員)

ただ今の上條委員のご発言に関しまして、一つ補足をさせていただきます。一つは、健康発達学部で、こども学科と食健康学科で共通の健康発達概論、健康発達実習というものを設けまして、お互いのコミュニケーションを取る、あるいは、将来的にそれぞれの職場に参りましたときに、やはり、管理栄養士の配置というものを、これから意図してまいりますので、そういったところで、お互いの職務を理解し合いながら互いに業務を行えるというような素地をつくっておこうということで設定しております。

それから食健康学科のほうでは、将来的に、やはりリーダーシップの取れる管理栄養士、管理職になれる管理栄養士というものも目指しておりますので、おかげさまでグローバルマネジメント学部のご協力を得て共通の科目といたしまして、経営学であるとか、アカウンティングであるとか、リーダーシップであるとか、そういった科目、グローバルマネジメント学部の学生と一緒に受講させていただいて、それぞれのそういった中で食に関する関心もグローバルマネジメント学部の方たち、生徒、学生さんたちにも持っていただき、また食健康の学生においては、そういった経営的なセンスを身に付けた上で管理栄養士になる。あるいは地域で開業できる栄養士になるというようなことを目指して、お互いに交流ができるようにさせていただいておりますので、補足をさせていただきます。

(安藤委員長)

ありがとうございました。これに対して、こども学科について、太田委員はどうですか。

(太田委員)

そうですね。横のつながりというのは、いろいろな所で寮のこともありまして、あるいは発信力ゼミのような対応で、学部、学科、構内で学生が混在する形で学ぶ機会というのを増やしていけると考えています。

初年次のところから、そういうふうに関わっていくので、それが横のつながりを広げてい

けるような入り口になるのかなというふうには考えています。あと上條委員がおっしゃられたように、4年制大学として、地域のリーダーの養成というところは、やっぱり意識して頑張っていきたいというふうには考えているところです。

(安藤委員長)

ありがとうございました。それでは、別の委員の方、もしご要望等あればお願いいたします。山浦委員、どうですか。

(山浦委員)

大変立派にできて、私も行きたくなるような大学だなと。そういうふうに思っております。大変、素晴らしい学科になりそうで、期待を申し上げておるところであります。

ちょっと余計なことかもしれませんが、大学申請のところの話ですね。目的、養成の所に、流行りの地方創生という言葉を入れたほうがいいのではないかと私は思っているのだけれども、地方創生にするか、長野県の地方創生を、これを地軸にやるとか、そういう言葉を入れたほうが、今の現代に合っているのではないかと、という気がしているのですけれども、そんなふうに思います。それから4学期制になって僕、まだレベルの低い話で、大学が4学期制になっているっていうことは、もう期末試験は4期ごとにやっているっていうふうに理解していいのですか。

(安藤委員長)

2カ月ごとに、ですね。

(金田一副委員長)

2カ月ごとに試験をするということです。

(山浦委員)

期末試験をやるのですね。

(金田一副委員長)

そういうことで、ちょっとハードではありますけれども。ただ科目数が半分に減りますので、週2回、集中して、半分の科目について、2カ月ごとに試験をする。今までは4カ月かけて倍の科目をいっぺんに試験したのですけれども、今度は2カ月ごとに半分の科目を試験するというので、ある意味、集中してできるというメリットもあるかと思っております。

(山浦委員)

そうですね。ありがとうございます。

(安藤委員長)

地方創生を強力に推進していただく、ということについて、高田担当部長、宮原課長、どうですか。

(宮原委員)

確かにそうですね。大学が地方創生の核になるべきだという議論もごございますので、確認させていただきたいと思います。貴重なご意見だと思います。

(安藤委員長)

ありがとうございます。それでは、もしこれ以上ご意見がなければ、この設置案の概要によりまして、文部科学省への認可申請を行うわけでございますけれども、資料の詳細ですとか、それから審査過程における対応等につきましては、私と金田一副委員長にお任せいただければありがたいと思っておりますが、どうでしょうか。特にご意見がなければ、そうさせていただきますたいと思います。

ありがとうございます。それでは次の議題に移らせていただきます。議題の3、教員の選考状況について、ご報告をいただきたいと思います。それでは事務局のほうからお願いします。

(宮原課長)

それでは資料の3を、ご覧をいただきたいと思います。教員、あるいは助手も含めた選考状況ということでございます。グローバルマネジメント学科以下、学科ごとに記載をさせていただいてございますが、グローバルマネジメント学科の欄には、総合教育の担当教員、それから英語の担当教員を含んだ数とさせていただきます。

特に食健康学科、定員、学生定員30人、入学定員でございますが、30名に対して専任教員13名、例えばこども学科、定員40名に対して、専任教員15名というのは、教員1人当たりの学生数ということで見ますと、かなり充実した態勢になっているのではないかな、というふうに思っております。

合計欄にございますとおり、専任教員65名、助手4名を選考済みとなっております、欄外にございますとおり、専任教員と助手をそれぞれもう一人、現在、最終交渉中でございます。最終的には専任教員66名、助手5名という形になる予定でございます。

当初は専任教員74名、助手5名と見込んでおりましたが、ご覧のように、内訳にちょっと書いてございますが、教授、准教授クラスの先生方を中心に非常に業績の高い先生方をお願いすることができました。こういった関係で、人数としてはこの人数で、そこにこの表の右側に記載をしました非常勤講師の先生方を含めて、先ほどのカリキュラムを全てご担当いただけるような態勢となってまいったという状況でございます。

ちなみに文部科学省の設置基準の所で申し上げますと、本学の学科構成、それから規模でありますと専任教員は49名が必要教員数ということになるかと思っております。そのうち、半数が教授でなければならないとされておりますが、この辺はもう十分にクリアをするという形になってございます。

冒頭にちょっとお話ございました非常勤講師の選考にあたりましては、本日、濱田学長、お見えですが、信州大学の教育学部、経済学部をはじめ、県内大学の皆様に、大変ご協力をいただいております。ほとんどの先生方、ご多忙の中、こういったらあれですが薄謝にもかかわらず、ご快諾をいただきまして、本当にありがたい思いがいたしました。

開学後は大学それぞれの専門分野を生かして、逆に本学の先生方が県内大学のお手伝いをさせていただけることもあるのではないかなというふうに思っておりますが、そうした形で連携をさせていただければ、大変ありがたいことと思っております。あらためて御礼を申し上げます。以上でございます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。ここまでの教員選考状況につきまして、金田一副委員長、お願いします。

(金田一副委員長)

いや、もう私が思っていた以上に素晴らしい先生方がお集まりいただきました。面接等を見ますと「私はぜひ長野県で教育したい」と言って、来てくださる先生が大変多い。やっぱり、長野県っていうのは、それなりに魅力のある県だということだと思います。

そういう専任の素晴らしい先生がお集まりの中、非常勤の先生につきましても、信州大学の先生にかなり協力をいただきまして、濱田学長にも大変ご協力いただき、深く感謝しております。どうもありがとうございます。

(濱田委員)

ちょっとうちの非常勤の決まり方を紹介しますと、実は、われわれの教員が外で非常勤やる場合には、部局長の承認になっていまして、学長まで実は上がってこないの、いいことになっていきます。ぜひ、部局長というか、部局の中で、本当に適切かどうかっていうのは、その先生がそれぞれで、自分の所で持っている科目があつて、それをちゃんと審査するのが各部局にありまして、最終的には部局長に権限を全部、学長が委嘱する形になっているのですね。

ただ権限のレベルが上がってくると大学承認になってくるので、非常勤は教育関係ですので、そこで認める形になっておりますので、ぜひ、今後とも関係する部局とよく話し合ってくださいと思います。

(金田一副委員長)

いや、本当に助かっています。

(濱田委員)

よろしくお願いします。

(金田一副委員長)

うちの大学ができましたら、ぜひ、こちらからも素晴らしい先生、たくさん集めましたので、ぜひ、そちらにも。

(濱田委員)

逆の場合は、大学の一番上の会議に出して了解を得ます。

(金田一副委員長)

そうですか。

(濱田委員)

私の一存ではちょっと。それが信州大学のシステムになっております。

(金田一副委員長)

了解いたしました。

(濱田委員)

また、是非よろしくお願いします。

(金田一副委員長)

はい。是非よろしくお願いします。

(安藤委員長)

それでは、森本委員、グローバルマネジメント学部の教員について、コメントありますか。

(森本委員)

教員では、先ほど申しましたように、本当にさっき言った各アカウンティングについてもファイナンスにしてもマーケティング、経営組織論、そういうそれぞれの科目、普通の大学ですと1人専任がいればいい。そういうものが全部2人配置している。経済学も2人おりますし、そういう法律も2人持っておりますし、そういう意味で大変、充実した教員構成にな

っております。

そういう意味で学生に対しても、それぞれ満足した講義ができるのではないかということです。いろいろ、特に信州大学の先生方に、大変、ご快諾いただきまして、ありがとうございます。ありがとうございましたということ申し上げます。

(安藤委員長)

ありがとうございます。それでは次の議題に移らせていただきます。海外プログラムにつきまして、これを事務局のほうから説明をお願いします。

(宮原課長)

はい。海外プログラムにつきまして、資料4でご説明をさせていただきたいと思っております。先に2枚目をご覧いただきたいと思っております。本学の特色の一つでございます海外プログラム。教員予定者の先生方のご尽力等によりまして、派遣先が固まっております。

表にございますとおり、グローバルマネジメント学科は、5カ国、6グループ、6カ所への派遣という形になってございます。アメリカ合衆国、ニュージーランド、これは2カ所でございますが、スウェーデン、フィリピン、イギリスということでございます。アメリカ、アジア、オセアニア、ヨーロッパ、さまざまな地域から学生に選択をいただけるような形となりました。

食健康学科では、アメリカ合衆国、それからニュージーランドと、いずれもわが国で言います管理栄養士に相当するような資格者の方が、非常に社会で活躍をされている国ということで、その状況を学んでこられるのではないかとということでございます。こども学科では、フィンランドということでございます。非常に幼児教育、それから自然教育についても先進地ということで、その状況を学んでこられるかということでございます。

研修先は大学、あるいは高等教育機関でございます。2週間から4週間のプログラムということになります。先ほどちょっと申し上げましたとおり、グローバルマネジメント学科、それから食健康学科については、派遣先の地域、それから期間、それに伴って参加費も若干異なりますので、そういった点も踏まえて、学生さんに選択をしていただくことができる形となっております。

1枚目にお戻りをいただきたいと思っております。このプログラムは、原則として、全学生が2年次に参加をするプログラムとしてございますが、単なる語学研修というわけではないということがございます。語学に加えまして、2年次以降に本格化する専門分野の学びを体験できるように本学の学生向けに作っていただいた独自のプログラムということでございます。

そして、海外研修、現地研修に向けまして、1年次から準備をしております。一つは英語集中プログラムということで、授業としての取り組みという所に記載をさせていただきましたが、100分授業で週に4回、ネイティブの先生と日本人の先生、教員が連携をいたしまして、読む、書くだけではなく、話す、聞く、の4要素にわたって英語を正確に使えるよう

に、また同時にためらわずに英語を使えるようにといったような姿勢を身に付けていただくようなプログラムを、今、検討をしていただいております。

一方、授業の外でも親元を離れて1年間、全寮制で寮生活をしていただくことによりまして、自分自身の生活を律する力、それから学生同士、地域の人々とも関わりを持って、社会性やコミュニケーション能力を高めていただく。その上で海外に出発をしていただけるような仕掛けとなっております。

現地では、記載をさせていただいたとおり、語学を学びながら、専門分野に関わるレクチャー、あるいは体験等をしていただきまして、その後に控えています専門分野を学ぶ動機付け、専門分野を学ぶ上での視野の広がり、こういったものを体験していただくような独自のプログラムとなっております。

少数の希望者だけではなくて、全員が、この海外体験をするということにつきましては、帰国後も学生同士でその刺激ですとか、体験をお互いに話し合い、共有することができる、あるいはそれを高め合うことができるような環境をつくることのできるのではないかなというような意義を持っているかと思っております。こうした全員参加のプログラムとしては、2週間から4週間の短期プログラムが最適であるということで、こういったプログラムになってございますが、さらに中長期の留学を希望する学生が出てくることを期待をされています。

そのために今回、知事や安藤委員長、山浦委員が訪問されました、例えばコロラド州の大学、あるいは、現在、県短期大学が提携しているミズーリ大学、河北大学等、こういった所もベースに、今後、海外の大学との連携も検討してまいりたいというふうに考えております。説明は以上でございます。

(安藤委員長)

ありがとうございました。この海外プログラムにつきまして、金田一副委員長から、何かございますか。

(金田一副委員長)

はい。これは、うちの大学にとっては、大変大きな意味のある短期留学になると思います。単に業者に丸投げするような、そして語学研修だけやるような、そういう教育では意味がないということです。これは先生方にご尽力いただきまして、専門科目とみなせるような内容を含む研修にしたいという目的でつくりました。

これは、本大学ができる前につくるということで、かなり契約する上で、難しい問題を含んでおりましたけれども、先生方にご尽力いただき、また準備課の方でも尽力いただいたおかげで、何とかいいものができたと考えております。

(安藤委員長)

受け入れ先も、もう全部、訪問して、カスタマイズされたプログラムということで準備がスタートしている、ということですね。

(金田一副委員長)

そうですね。一応、もう新聞にも出ましたから、やらざるを得ないというところに来ております。是非、よろしくお願いします。

(安藤委員長)

分かりました。それではこれにつきまして、委員の方のご意見等があれば、いただきたいと思えます。内堀委員、どうでしょう。

(内堀委員)

はい。こういうふうには全員が、短期間ですけれども、留学をするこのプログラムというのは、非常にいいなと思っています。それで1枚目の一番下のところに、こういう全員共通のプログラムを全学生が行うとありますが、その先にもっと興味があって行きたいという学生については、そういう環境をできるだけ大学で整えていただいて、例えば1年余分にかかっても、向こうで1年やってくるなど、そういう学生の環境も整えていかなければ、というふうには思いました。

あとプログラムの中身ですけれども、この現地研修の狙いや特色のところに単なる語学研修ではないということが書かれていて、いいことだと思いますが、そうすると、現地での交流ですとか、こちらから発信していくっていうところが、とても大事なところだと思います。

それでこの大学の特長として、発信力ゼミを設けているので、行ったらほとんど質問もなく、ただ聞いて、2週間いて終わったということではなくて、現地の学生さんとの交流はもちろんですけれども、今、自分たちが課題意識を持っているようなこととか、将来やってみよう勉強だとか、それから日本の現状だとか、あるいは、こんなところが疑問に思っていて、現地ではどうなっているのかというようなこととか、一方的に聞くだけではなくて、様々にこちらから発信し問うといった働きかけをすることによって得られるものが多々あると思うんですね。

そういったところで、向こうに行くと、日本の学生は、むしろプレゼンテーションをしたり、発表をしたりして、それを基に向こうから意見をもらって学んで帰ってくるというようなプログラムも、是非入れてもらえるとありがたいと思います。

それから全体を通じてですけれども、学部・学科の壁だとか、日本と世界との壁だとか、今、壁というのがあると思うんですけれども、この新しい大学に限らないとは思いますが、存在するいろいろな壁を乗り越え、枠を取り払って、本当にいいものを探して、他者と一緒になってそれを創っていくというような学生、社会人が求められる時代に入ってきたと思う

んですね。

この大学は、是非、そういう学生を多く輩出するような大学になってもらいたいと思っ
ていまして、そういう意味では、先ほどの科目選択についても幾つかご意見がありましたけれ
ども、縦割りになって、これしか取れないということではなくて、他学部、他学科と、専門
教育科目であっても取れるというような仕組みですとか、あるいは他学部、他学科の学生同
士の交流や、他学部、他学科の先生との交流、つまり、よその学部・学科なのだけれども、
興味があって食い付いてきて、頑張っって勉強したい、あるいは質問があるというような学生
が、積極的にこの大学の中で、さまざまなタテ・ヨコ・ナナメの交流や学びができて、さら
には、一つの大学からはみ出ていたり、外から入り込んでもらったりして、4年間大学に
はいましたが、毎日講義を受けて終わってしまいました、みたいな学生がほとんどいないよ
うな大学になってもらいたいですし、大学が活気に満ちていて、何かこの子たち、とんでも
ないことをやらかしそうだという学生が、いっぱいいるような、そういう大学になってほし
いと思っています。

(安藤委員長)

大変大きな期待感を表明していただきましたので、金田一副委員長、どうですか。

(金田一副委員長)

まさに、是非、それを目指したいと考えます。学部を超えて履修できるように。先ほど、
上條委員からありました、二つの学部はかなり違う学部だという指摘は、確かにその通りだ
と思います。でも、その短所を長所に変えて、そこから多様性といいますか、それが交わる
ことによって、何かよりよいものをつくっていけるような形にしていきたいと思いま
す。その交わる場が一つは寮であり、それから授業でも、総合系科目は、発信力ゼミをはじ
めとして、一緒に集まりますので、学部を超えていろんな意見があつて、その中で育つて
いくことによつて、総合的な視野が広がるような学生を育てたいと考えています。どう
も、貴重なご意見ありがとうございました。

(安藤委員長)

どうもありがとうございます。海外プログラムにつきまして、山浦委員、何か企業の立
場からご意見はございますか。

(山浦委員)

いずれにしても、前も申し上げたのですが、長野県の企業も東南アジアの地にい
っぱい出ていって、後継、オーナー社長とほとんど新しい社長は、みんな海外の工場に行か
ないといけないということで、今まで出ていった所は、どういうふうになっているかとい
うと、大体、大企業の人をスカウトして現地の社長、現場の社長とか、責任者にして、とい
うよう

なことで、みんなしのいできたのですけれど、これからはそうはいかないので、やはり、その人自身が行かなければ。今の我々以下の新しい経営者になってくると、やはり、留学したりする人が多いですね。留学する人が多いものですから、そういう人を自前で、やはり長野県としてつくっていくというのは、非常に重要なことであります。

上手いコミュニケーションができるということが大前提であって、簡単に言えば、外国語でお互いに話ができるぐらいのレベルになってくると、世の中に出てもすごくグローバルな人間が輩出されるのではないかと期待しておりますので、是非、これをきちんと充実した海外研修にしてもらいたいと思っています。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございます。それでは、海外プログラムにつきましては、当委員会としては、この資料4に説明されておりますように研修先、また現地研修を実施していく方針としたいと思います。

それでは、このプログラムが本学の大きな特長となっておりますので、これから特に高校生の方々にアピールしていただいて、本学の特色として周知を図っていきたいと思います。よろしく願いいたします。

ということで、それでは引き続き海外プログラムの準備を進めていただくことにしまして、大体、これで今日の議題は終わりました。それでは、最後に全体を通しまして、もし委員の皆様方から、ご意見、ご要望、ご質問等ございましたら、残された5、6分の時間を有効に使いたいと思いますが、いかがでしょうか。

(安藤委員長)

上條委員。

(上條委員)

二つの学部、幾つかの学科があるけれども、それをできるだけ交流の場にしていきたいという大変、心強いお話をお聞きしたのですけれども、一つ、是非、お願いしたいと思っていますのは、今まで議論があまりありませんでしたけれども、学生には大学での学生生活というのがありまして、学生の仲間づくりといいますか、大学において新しい世界を一緒につくっていくという、これはものすごく大事なですね。先生と、あるいは教職員と学生とのコミュニケーションもさることながら、一番、やっぱり中核になるのは、学生同士の交流、そこで新しいものを発見していくという、これが非常に大事なのです。

実は、今回、私、非常に心配していますのは、三輪キャンパスにグラウンドがないということ、それからもう一つは、体育館が今の短大の体育館よりも小さいということ、こういうこと、それでさらに学生にとって、サークル活動、その他をしていく、そういうものが、大変重要なのですね。

それは当然、これから考えていっていただけたらと思いますが、学生たちは、学内、学科、学部を超えて交流しますし、さらには信州大学の工学部や教育学部の学生とも交流することによって、実は、今、学生生活を非常に充実させているわけです。

そういうものを、「今回の校舎は、あちこちにたまり場をつくった」というふうに言いますが、それだけでは、やっぱり足りないのではないかと。やっぱり、きちんとサークル活動ができ、グラウンドがあり、そして他の大学との交流ということをしちんとしていくという、そういう場面がないと、寮は1年だけですし、それだけで学生の絆ができるというふうには、ちょっといかなないのではないかと。それをぜひ配慮していただいて、学生にとって住みよい大学、住みよいキャンパス、それを、ぜひこれからしっかりと充実させていっていただきたい。こういうお願いをしておきたいと思います。

(金田一副委員長)

貴重なアドバイスを、ありがとうございます。

(安藤委員長)

ありがとうございました。それでは、濱田委員。

(濱田委員)

海外プログラムは、当然、英語ベースなので、英語圏っていいのではないかと考えているのですが、ただ、ちょっとこの間、長野県の日中友好協会の中に学術委員会って、私、ちょっとその委員長させていただいているので、「もう少し県立大学も中国と」という意見が、そこでも出ていたので、是非、今後は、ちょっと中国のほうも、こういうプログラムではなくて、何かをやっていただくといいかなというのは、これはちょっと、長野県の日中友好協会の学術委員長としてのお願いということです。

私どもの大学も、中国に日本人学生が行くというのは、あまりやっぱりないですね。ただ中国の留学生が、今でも信州大学は百何十名と一番多い。ちょっと割合は、全体が増えたので、割合は、今、もう4割切っていますけども、ただそれでも毎年百何十名来ていますので、そういう形で、我々は、どちらかというと、そういう形でやっていますので、また何か、ちょっとその辺も、そこからの要望が出ておりましたので、是非、またお願いしたいと思います。

あと、上條委員がおっしゃった大学間の連携というのは、また高等教育コンソーシアム信州ということで、長野県の四大全部入っているコンソーシアムもございますので、それもご活用いただく。それも会長としてのお願いですので、是非よろしく願いいたします。

(安藤委員長)

はい。ありがとうございます。それでは、今日は、委員の皆様方、ご意見をいただきまし

て、ありがとうございました。議事も全て終わりましたので、これで終了とさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

(金田一副委員長)

ありがとうございました。

(事務局)

安藤委員長様、議事進行、どうもありがとうございました。また委員の皆様におかれましては、長時間にわたり、ご熱心に議論していただきまして、誠にありがとうございました。重ねてお礼を申し上げます。

次回の設立委員会の日程の調整でございますが、あらためて行わせていただく予定でございます。本日、設置認可申請について、ご了解いただきましたので、次回は、認可の報告ができるように教員予定者の先生方とも準備を進めてまいりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。それでは、以上をもちまして、第8回の県立大学設立委員会を閉じさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

(了)